村田良穂 著

正修 嚴島宮路枝折 全

特56
特56-946
946
1200800257063

始

特56 ~~特31~~
946 ~~340~~

いつくしま

英やちまた

志を星金

村田良穂編

序

登さあたりゝ参り面白き處ゝ到てゝ。親しき友を志のひ。歸たらんゝゝ。とありしかくありしなど。かたらむ事を。誰しの人も必まづ思ふ事なり。されど山を越し海をゆたりて日數へぬきバ。忘ぬる事ぞも少からずして。急ゝ思出んことかたき事ゝなんありける。我が嚴島は廻七里ばかりの島なれど。宮居の高大なるゝいふもさらまて。此處も彼處もみなゆゑよしある所々ゝしあれバ。ひとたびふたゝび參りたりとて。なぞかゝ委うすべき。然る故ゝ元祿十年小島常也嚴島道芝記七卷を撰むこきぞ當島の來由。祭式の次第。名所の故事等を纂しもれの權輿ゝゝありける。甚後天保七年岡田清筆とりて。嚴島圖會十卷を編成す。此は繪もまたゝくみゝもれしたきバ。ゝの島ゝ渡らぬ人すら。ゝきを見バ。大宮の壯觀祭式の嚴重。寶物の形狀名所の緣由なぞも。委うゝらるべきもれゝしあれぞ。從者なぞをもつきず。ひとり杖をひきて參きる人々の。さる容易からぬものを負持たらむ事。旅籠ゝあまりていと重かるべきことなり。されば島内ゝむねとある條々と摘み。また圖會のなりたる後。神佛混淆引分の

事あり。去かして國幣中社になりたまひたまへ。祭式の改りたる地名のかはりたるなどをあらはし。彼の圖會よ洩たる事どもをも拾ひあはせて小冊となすべく。すゝむる人れあなるに。れほけなきさながら。かくもれする事とゝ成けり。かゝるべ故事などの委からぬを咎むる事なかをゝれはたゝ此神社よ參りたる人々の。三五日がほどよ本社よりはじめて摂末社。さてゝ名たゝる所々をも廻らむ道の去るべともなり。且ゝ家よ歸て。とありしかくありしなど。人よかさらむまゝ。ろたぼ記の料よとてなむ

明治十一年五月廿日ばかり神園の立花

かをりくる朝座屋の窓下ふ筆をとりて　琴秀舍主人去るす

凡例

一此編ゝ究て簡約を要す。さるど現今所在の摂末社ゝ小祠といへども一宇も洩す事なし。然るよ天保七年所編の嚴島圖會よ見記て此編よ載せざる神社往々あり。其ゝ明治五年改革の際最寄の神社へ合併よなりさるもれと去るべし

一寺院も現今所在のものゝ悉く擧ぐ。是又彼圖會よありて此編よなきもれ多し皆廢寺よ成たるなり又地藏堂等の深き來由なきゝ省けり

一名所古跡等も悉く洩す事なし。さるども殊なる趣もきく。指せる由緒もあらざるゝ總て省けり。まさ故事ゝ畧言して其大槩を去らしむ。委くゝ彼圖會よ引合せて見べし

一古と今と景況の替りたるど。地名の改りたる等ゝ其處々よ附ていふべし。總て現今の實景を著ていさゝかも飾言する事なし

一神社佛刹名所古跡等錯列せるゝ。本社より始て摂末社等順拜の便りよ因て去るしたるもれと去るべし

以上

嚴島社頭出全景

岩倉具選卿

多知可幣理美耶古

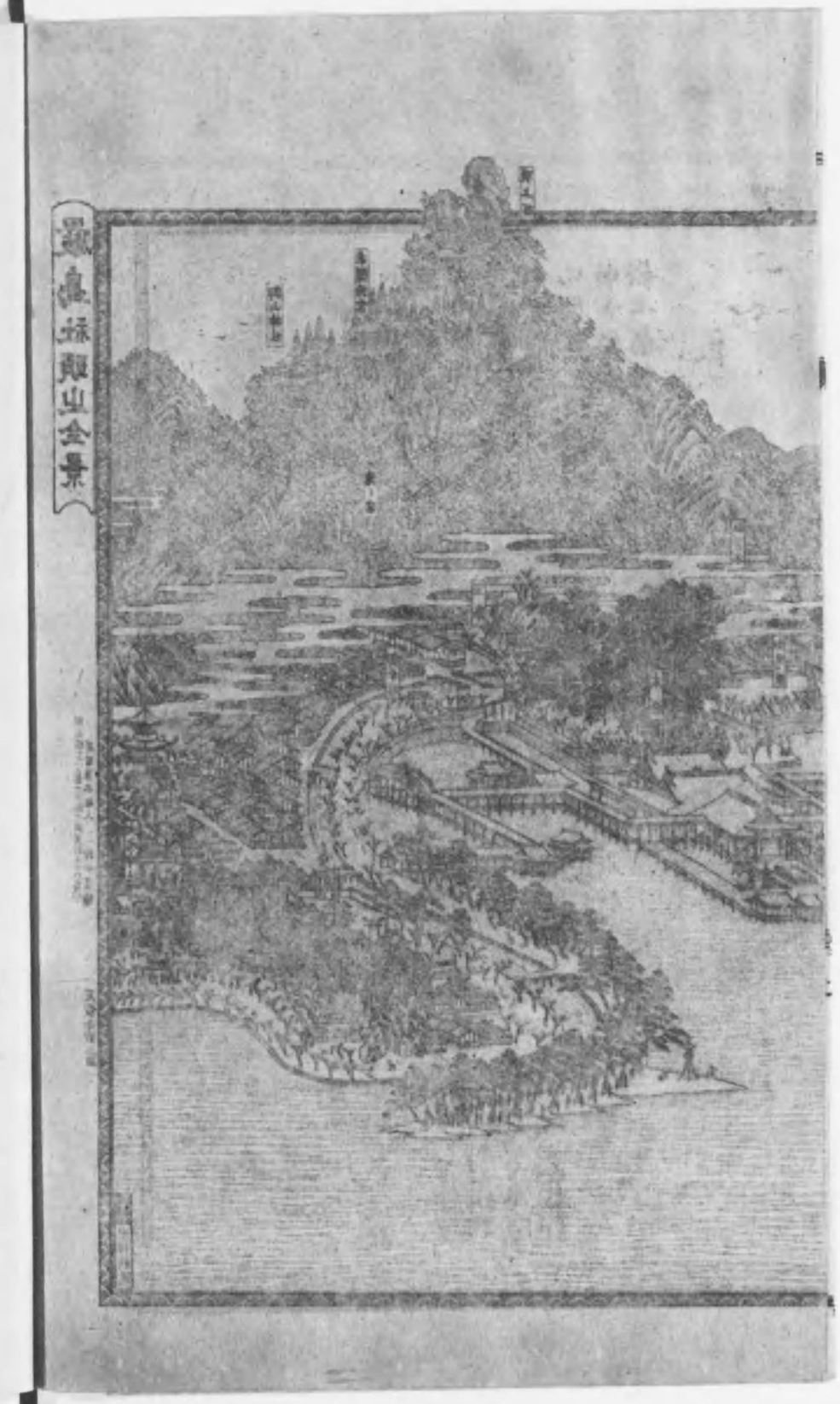
能飛登耳迦太羅武

裳許止波者通枳慈

伊都伎之末八滿

裳詩止洲老道拙系

伊都伎之末八滿



嚴島宮路は枝折

廣島縣安藝國　村田良穂編輯

嚴島は安藝國佐伯郡の海中に在て周廻七里。北の方廣島を去ること五里餘。西の方は同郡大野村最近くして一里に充す。南はるかに周防伊豫の山々を見渡し。東は能美江田等の諸島に對し。山嶺巍々として松杉色深く人戸千軒本社のかゝはらに市をなせり。殊に當島は櫻樹數株ありて艶陽の花は頃は。白雲長く連なりて山の腰に鏡懸す本社は戌亥の方に向ひて三笠濱の下津石根に宮柱太敷立て。潮滿時は大宮の床下まで浪をたゝへて。遊べる魚も手に捕るばかりなり。抑當社本殿に鎮りまします三柱の姫大神は。掛卷もかしこき素戔嗚尊の御子にましけるが。天照大御神の神勅のまゝに。葦原の中津國に降りましましして天孫の爲に祭をたまふ我が皇國の守護神たりの意を取る事上神代紀斯て當社に御鎮座ましける事は一書に端正五年とあり。然るとも大歳癸丑端正元年大歳癸丑端正元年なるべし○端正は後花園天皇の御代端正元年号安藝國佐伯郡の住人佐伯鞍職と所の翁名詳不二人同郡恩賀島に魚を釣てありしに紅の帆を揚て西の

方より來る船あり近づきて船中を窺へば舳前に嚴鋒に赤幣立たる嚴瓶を置て三柱の姫宮にはします。鞍職にむかひて宣まはく吾れ古より此島を敢て幽事を治め百王を鎮護す汝朝廷に奏て此島に造宮すべしと示現あり。即鞍職都に上り神託の次第奏聞を遂げるに折節都にてもまさに神變ありけるによりて奏す隨て社殿造營すべく勅命あり。鞍職畏りて當島に歸り。先づ大宮造るべき地を定んと新に船を造て舳前に五百津眞坂樹五百津野籌の八十玉串に珍の幣帛とりかけて。當島の浦々を覓巡るに靈鴉山上より飛來て舳前に進む乃ちまさを導れ神として海濱を漕回行く に竟に三笠濱に止るかくて佐伯所れ二翁諸人をひきゐて三笠濱に大石小石を打ならし遠山近山に大峽小峽に立る樹を齋斧以て伐採り。高天原に千木高く新宮造建て其歳の十一月辛酉朔壬申常世に神鏡と祝ひ定て鎮奉る記に以上當社鎮座まさに古傳に人皇十一代垂仁天皇に御代大神此島に御鎮座ありて御山神社其舊推古天皇に御代佐伯鞍職に示現ありけるに跡なりしもれなりといふ。かゝれば當島舊に恩賀島といへり より大宮造立ありしにより神に御名を島に名におはせて市杵島しを。大神鎮座ましましけるによりて

とも伊都伎島とも稱へまさに嚴島とも稱ふなるべし又宮島といへるも古くもれに見ゆたるとも今に公の御文にすべて嚴島と稱へらきたり斯て創建の後度々朝廷より修理を加へさせらを祭式も重く行はせられける由いひ傳ふるとも天文十五年當社神主源實就佐伯郡櫻尾の城主たりし時大内義隆に亡さを舊記多く兵火にかゝりて失ひたるを往古朝廷より御寄附等に證據となるべき文献藥ある事なし然るとも延喜式神名帳に安藝國佐伯郡伊都岐島神社名神大とあり三代實錄に御贈位の事二度まで見ゆれば當時御祭式等のれろそかならざりし事れしてゑるべしかくて平相國清盛安藝守たりし時より渇仰の思ふかくさらに神領を增加し社殿經營功を盡し摂末社に至るまで殘る處なく修理ありけるを世に比類稀ある壯觀とぞなりける殊に承安四年後白河法皇御幸あらせられまさ治承四年高倉上皇御幸の節に金銀の幣捧げたまひて御崇敬淺からさりし御事なり其後鎌倉の將軍家續て足利氏まさ本國に領守大内毛利福島淺野氏よりも時々所願を籠られ神領寄附米許多ありて絶ず社殿に修理を加へ祭式怠る事なく行はれ明治元年朝敵一新の際改て勅願

所ゑ定めさせらゐ年々御拵物を治めたまひ同四年神佛混淆引分とゐり て別當供僧を廢止せられ尋て國幣中社ゑ定先させたまひ祭式等嚴重ゑ 改りけるゐ誠ゑありがさき例ゑまそゐ有けれ

○參拜順略

○本社本殿　祭神　三座

市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

相殿

國常立尊　天照皇大神　素戔嗚尊　外一世三座

○本殿　梁間六間三尺六寸　桁行十三間二尺二寸

○大床　巾五尺

○幣殿　梁三間一尺五寸　桁六間一尺八寸

○拜殿　梁六間四尺四寸　桁竪七間四尺八寸　横三間四尺

○祓殿　梁六間四尺八寸　桁十三間三尺八寸

○高舞臺　梁二間五寸　桁五間五寸

○平舞臺　平面百八十六坪

○火燒前　巾一間五尺三寸　長七間一尺三寸

○樂房　左右各二字　俗ゑ舌先といふ

○門客神社　二宇火燒前れ左右ゑあり

祭神　櫛石窓命　豐石窓尊

○廻廊　巾二間二尺　長百四十八間三尺　本社の左右ゑ長く屈曲して一間毎ゑ鉄燈籠を釣たり　汐滿ときゐ數多の燈火波ゑ移りて光景たとへんゑもれなし

社頭明燈　八景の一

影うつる月の光も消たれけり波のほてらす宮のともし火　芳樹

涙の上もみなともし火の花咲て春をとこよれ色さの大宮　種守

夏神祇といへるゑとを

すゝしさのいつくゐあれと嚴島神のまゑまゑ浦風そふく　清綱

はらへするきねゐ姿もいつくしま夕日を洗ふ波の涼しさ　清矩

七月十日ばかり嚴島の社頭ゑ侍ひて

浦松の風もたとせぬ夕なきゑ志ほみちくらし月そ浮へる　尊福

社頭賞月

百八廻廊圍海宇大潮浸月夜過午此時安得起龍王　適處

同見凌波素娥舞

社頭ゑ侍りゝる夜千鳥をきゝて

燈火もまはらに更て大宮のさと殿ちかく千とりなくなり　幹之

○客神社　祭神　五座

天忍穂耳尊　天穂日命　天津彦根命　沼津彦根命　熊野樟日命

○本殿　梁五間二尺五寸　桁七間五尺五寸

○幣殿　梁二間三尺五寸　桁五間四尺七寸

○祓殿　梁五間一尺四寸　桁五間三尺五寸

○大床　巾　四尺六寸

○拜殿　梁四間一尺八寸　桁十三間二尺

○鏡ヶ池　客神社の傍玉の御池は内よりあり汐退きて後平沙よ丸く窪みたる處ありて一小池をなせり秋夜月影まの池よすめる最あはれよ清らかなり

鏡池秋月　八景は一

厳しまいつくゝあをとくもりなきかゝみの池の秋夜の月　正風

○朝座屋　梁五間一尺五寸　桁十一間八寸

○朝座の清水　朝座屋の傍なる御池の内より常よ湧出て甚寒冽なり潮退きて後汲むまとを得るなり又藥の水ともいふ

○神供所　朝座屋の内よ設く目今假よ本社拜殿の傍よ搆ふ

○社務所　同上

○揚水橋　巾一間五尺　長三間

かさはらよ平判官康頼硫黄ヶ島より流したる卒都婆の、寄り付さりしといへる石ありまさ康頼歸洛の後寄附の石燈籠一基建りかさち甚古雅なるもれなり

○大國神社　本社の左よあり

祭神　大國主命　相殿　保食神

○天神社　同上

祭神　菅原大神　又云天社天神

○長橋　巾一間四尺八寸　長十八間

○反橋　巾二間二尺　長十一間三尺

○能舞臺　能奥行の時ゝ海面よ棧敷を設く

○行宮跡　能舞臺のあさりをいふ高倉上皇御幸の時此所よ御所を設けらきたりといひつさふ

○玉御池　大鳥居より内潮の到る涯をいふ○大神鎮座の昔此處よ玉をうつみたりしよりてかく稱ふと云傳へり

○齋垣　總周百九十一間四尺　玉の御池の岸上ゑ建り
○繪馬　社頭の梁間ゑかゝげて大小すべて幾百枚なるゑとを
ゑらずされバ玉石を撰ま寸人々よく稱呼するもれを
ひづかゑ畢ぐなは好事の人熟覽して筆意の淺深を味
ふべし○左ゑ記載する順次ハ筆蹟の甲乙ゑよらず東
廻廊より西廻廊ゑ至る是ハ見ん人の便ゑ隨ひてなり
○鶴　東洋○張飛　古秀○秀鄉　素絢○三十六歌仙　書實隆公
書光信○神鴉　黒湖○狛鉾　丹倫○陣譜　昇齋○孔雀　朱紫石
○龍　杏雨○鐘馗　藍江○吳工女　應震○陵王　梅華齋○虎
專定○白鹿　春水書○曹操　海僊○鯉　探幽○山水　抱一○
靜觀　高時書○松　光孚○韓信　觀山○蝦夷人物　武四郎○鶏
應皐○神馬　僊助蒔繪○草摺引　俊峯○本社ノ詩　丈山自剋○
是蓬萊　敬幸書○敦盛直實　丹覺○廐馬　書工不詳○鷹　同上
○宗高　丹倫○檀風　藍江○孔明　直彦○波上日出　書工不詳
○羅生門　尙信○松竹梅　眠山○繫馬　左近○三福神　常信○

龍　伊川○寶船　書工不詳○神光照海　實美公書○田植　永叔
○龍　愛信○松間日出　雅信○神馬　江阿彌○三十六歌仙　楊
忍○清正　元義○鯉　雪塘○狂歌　貞佐○義家　有景○馬　書
工不詳○牛若弁慶　元信○草摺引木偶　作者不詳○仙人圍碁
岸頁○三十六歌仙書常雅公書左光芳右光惇○耶馬渓　皆雲○鶏
松林○漁樵　二永○蝦蟇仙人　兆殿司○神功皇后　驪山○福
海壽山　蒙慮書○日東第一勝　子琴鐵○山姥　蘆雪○花紅葉
光孚○花瓶　逸峯○大印譜　梅香○神女　書工不詳○神廟記
士式○菊慈童　藍江○道灌　芳園○玄德　楠亭○大哉　協書○
外國灣江　常春○虎　東洋○猿鹿　祖仙○太湖石　老山○神馬
荒雄○五十六歌仙　書龍山公書工不詳○誹諧ノ類句　蒼虬撰
○福祿壽　公長
○大鳥居　火燒前ゑ距る事五十二丈八尺本社廣前の平沙ゑ建り
潮滿時い參詣の船帆を揚げながら鳥居をくゝりて入
來るものあり○古より改造數度なりしが今建るもれ

ハ明治七年十二月斧始ありて同八年七月棟上の式あ
りしものなり

○柱　高七間二尺五寸　圍五間三尺三寸　○副柱　高四間四尺三寸　圍三間五寸

○棟　長十二間一尺七寸　上棟ヨリ軒先迄一間六寸　○額庇　二間

○左右距離　五間五尺八寸　○總高　八間三尺七寸

○額　竪一間二尺三寸　横一間二尺　○有栖川二品熾仁親王御染筆○昔の額ハ表小野道風裏空海の筆なりと云傳ふれど存在せるものなし元龜元年改造の時大内義隆奏請ありし後奈良天皇宸筆の古額ハ今神庫ニ藏す

明治八年七月大鳥居の更ニ建けるときよみはべる

暑き日も神の御前のさゝつみはさ涼しく鳥居立なり　魯堂

涼しさやとりゐもえはえ浮くはかり　一鳳

されて足るあきのすゝさや大とり居　蒼虬

○松原　右ハ玉の御池左ハ御手洗川の流ニそひて長くさし出たり松の木間ニ石燈籠あまた立ならびて是又社頭の光景を添ふ

○大願寺　眞言宗なり明治四年改革の前ハ本社修理造營の事を掌どりて庭内ニ小松内府の植たまひしと云傳ふ老松ありしが今ハ枯て僅ニ古跡を存せり○什物ニ古鐘、屏風、豐太閤陣中の吸筒、其他書幅等あり

○住吉神社　舊ハ大願寺の境内なりしが改革の際神地をとゝのつ

祭神　表筒男命　中筒男命　底筒男命

○石風呂　石を疊み土を塗て室を造り松を燒き潮をそゝぎて海藻をえき病者を入らしむ此風呂弘法大師の所造ニして功驗甚多しといふ

○大元浦　平原海ニ臨みて數條の櫻枝を接し花盛の頃ハ蒼々たる草の上ニ紅の氈敷て遊宴の興かぎりなくはるゝに大野の山を望みて夕陽を惜まぬ者なし

大元櫻花八景の一

大元の花のさかりニ成ぬなり神のをと先も袖やふるらむ　忠秋

れなしくい櫻の限りさめはへて誘ふ嵐をよそゑふせゐむ　鑑民

くろき羽を花ゑひり込むからすゐな　梅通

○大元神社　大元浦ゑあり○二月廿日百手の式を行ふ

祭神　國常立尊　大山祇命　保食神○相殿　佐伯鞍職

○橘山　此邊時鳥を聞くゑ便よき處なり○因ゑ云當島ゑてい

時鳥いとおはくれのあさつきの頃とおきバ山ゑても

鳴き浦ゑても名のり誰おい待あおしてつきなしと恨

る人のあるべき

なれもまさむらしさのふる時鳥たちはな山の夕くれの聲　石子

いへいへゑ聞しでゆくやはとゆきすず　鎮操

○經の尾　平清盛小石ゑ法華經を書て納らきし所なり

○空穗谷　秋夜草むらゑすたく虫の音いとあはきなり

淺ちふや月ゑ玉しく露ふけてひしれ音そよく夜半の秋風　頼玄

むし鳴くやさつかゑひよく磯のなみ　快々

○神底　本社の神馬を飼ふ處なり

○多寶岡　多寶塔ある故ゑかく名付く此邊も花見ゑよき處なり

○寶山神社

祭神　清正靈神

○愛染院　眞言宗ゑて大聖院の末派なり

○瀧本坊　同上

○清盛旅館跡

○留守口惠比須神社　中西町ゑあり

○祭神　佐伯鞍職

○金刀比羅神社　同上

○祭神　大物主命

○御手洗川　本社の後の流をいふ水源い紅葉谷の奥より出る

○筋違橋　御手洗川ゑ見させり

○寶庫　筋違橋の東ゑあり○寶物い卷末ゑあぐ

○花園　本社西廻廊の後をいふ櫻ばしゑ

風塵易負是烟霞咫尺江山萬里賒獨與嚴洲綠不惡

五年兩度去觀花　虎山

ちるかさと咲つゝ花のいつく島櫻の果かさくらなりけり　正勝

咲しより花を離るぬ胡蝶さへ夜かねねるを我やなるなり　柳處

○御幸松　後白河法皇御幸の時此處ゑ松の木の御所と稱へし行宮のありしといひつたふ

○御垣ヶ原　本社の後なり書ハ本地堂ありけるゑよりて觀音の原といへりしを明治四年改革の際本地堂を取除きて今の名ゑ改りたり此邊も櫻ばはし

○三翁神社　同所ゑあり○九月廿三日舞樂を奏そ

祭神　佐伯鞍騎　所の翁　岩木翁　平相國清盛公

相殿　大巳貴命　猿田彦大神　平相國清盛公

○千疊閣　龜居山ゑ建り豐太閤九州へ發向の時本社ゑ參詣ありて大神の冥助を祈り翌年凱陣の折柄まさ船をよせて報賽ありし時此堂を造られしものなり○此處臨觀最宜し

○豐國神社　千疊閣の内ゑあり

祭神　豐太閤

○五層塔　應永十四年七月建立といへりされど願主詳ならず

○荒胡子神社　龜居山の麓ゑあり

祭神　素戔嗚尊

○文庫　同所ゑあり本社の書籍を藏す

○湯立殿　同所ゑあり

○三笠濱　本社の邊すべて三笠の濱なれども尤きて廻廊の北口より龜居山のふもとの海邊をいふ○此處左ハ本社の殿宇建連り右ハ遠く海向ひの山々を望みて雪の景色甚清し

三笠濱暮雲と八景の一　美靜

誰もみな家路をすれてきてそ見る三笠の濱の雪の夕くれ　少年

月のかけ花の光もれはしとみかされ濱ゑふきるゑち雪　龜太郎

世ゑ絶しよそひやゆきのいつくしま　梅室

○有ノ浦　諸國の船當島ゑ來るもれい大槳此浦ゑ湊ふされバ參客の送迎諸荷物の運輸等常ゑ賑はしき處なり

有浦客船　八景の一

漕とむる船もあまゑゑ有の浦のうら安けなる波の上かな　季知

ぬきゑとれありの浦輪の友舟や花紅葉ゑもつとふ成らむ　春齢

○蛭子神社　有の浦ゑあり

○祭神　事代主命

○尼ノ洲　壽永四年壇の浦ゑて入水ありし二位尼の尸此處ゑ漂ひつきたりし所なりといひ傳ふ

○水天宮　瀆の町ゑあり舊い神泉寺境内ゑありしが明治四年改革の際此處ゑ移す

祭神　大綿津見神　安德天皇　二位尼

○存光寺　禪宗なり

○今伊勢神社　伊勢町の山上ゑあり

祭神　天照皇大神

○宮ノ尾　毛利元就陶全姜と合戰の時陣屋を設けらをし處なり

朝ゑ要害の鼻ともいふ

船子どもれ㊀く住居する處なりいゑしへい也びたる家のみなりしが今い樓など造りたるさへありて竈の烟もいと賑はへり

○小浦　ゑはたをて色なき海人の袖をしも長閑ゑかへそ春の浦風　忠

○蛭子神社　小浦ゑあり

祭神　事代主命

○西行返　西行法師此處ゑ來て島の女ゑ道を問たりしにとみゑ應へもせざりしかバ空蟬のもぬけのからゑゑと問へバ山路をゑへもをしへさりゝりと詠たりしゑ女はゝゑみてもぬけのから。かとこそよむべけを既ゑから。ゑと定めたをひゑさをバ答ふるゑよしなしといへりけれバ西行詞なくて此所より空しく歸りしと云傳ふ

○長濱　一名八重濱ともいふ此邊も櫻れはく眺望いと面白き

とゝろなり　蒲園

村雨のはるしなきさゝ露ちりてさゝ浪かをる花のゆふ風

まさ此濱ゑ海水浴場の設けあり○本島ゐ總て海濱ゑ細砂をしきて波動の強弱よく度ゑ適ひ殊ゑ島内遊歩の地も亦多く實ゑ適應の場處ありといへり因ゑ云、鳥居ノ鼻、大元浦、網ノ浦、等ゑても浴そ人あり、何をも潮瀬較急を量りて己が病ゑ適度の地を撰むもれあり

碧海廻山樹色新四時風景獨絶倫遊人此地異多事　世外

七處胡神七里濱

○長濱神社　長はまゑあり○相殿　所ノ翁

祭神　奥津彦神　奥津姫神

○二王門跡　長濱より本町ゑ越ゆる道なり此邊も櫻多し

○新町　いゑしへゐ最賑はへる遊廓ゑて全盛の太夫もあまさ在しがいつの頃よりか菅掻の音淋しく打掛の錦うらさびて踏ならす高足駄れ音ゐさしかけ傘の柄と共ゑ長く絶果たり實ゑきのふの淵ゐけふの瀬と替る流の身の定めなきゑ此處もまさ遊女の故郷となりさり

○德壽菴　存光寺の隠宝なり堂内ゑ金石の地藏菩薩を安置す

○瀧の尾　山上ゑさゝやかなる瀧あり此處舊釋迦の大像を安置せる堂ありし故ゑ大佛の原といへりしを近年改て今の名ゑなりたり○此邊も櫻かはき故ゑ櫻が茶屋なぞいへる樓ありまさ雪の眺望も甚よしとす

梅柳いろもゑはひもあかなくゑまゐまさくら花の大君　元延

とりをさへ遥ふえあゑ此あらしゐな　似水

雪の降々る日丸木樓ゑあそびて

白雪ゐ神垣ならぬあさりまてゆふかけてこそ降積りけれ　隆正

はねさ木のゆきや雪ちるゆきのうへ　巨桃

○梅林　梅ゐ近年植たるものなをども地味相應なしたるゑや年々ゑ繁茂し花の頃ゐ山風遠く薫りて衆人の袖ゑ餘るされバ文客かならずたづぬべき處なり

さきぬとてまつ鶯よ告やらむつかひさねなる梅のあさ風　清
かし鳥のかをりよむせふ聲すなり梅の山路の春の夕くれ　榎蔭
眼よあさる木ゝみならめれ月夜かな　筵史

○福壽坊　眞言宗あり近來大佛を安置せ

○北之神社　舊ゝ北之藥師といへりしが改革の際神社よ改れり

祭神　猿田彦大神

○寶壽院　眞言宗なり本尊阿彌陀如來ゝ往古當島網ノ浦の海中より顯はして靈驗多しといへりまさ堂内よ豐太閤の納たまひし藥師如來を安置す

○鳥居松　岡の上よ松二樹並び立るさまの鳥居よ似たるよ依て名づく此邊も櫻れはく眺望よき處なれバ霞たなびく春の頃ゝ遊客宴を開きていと賑はしきところなり

○本町　ときは木よ眼をやすめけり花さかり　鳳郎
北ノ町中ノ町幸町等の名ありて商家軒を連ねたり中よも名物の色楊枝杓子木盃等をひさぐ店數多あり

○幸神社　幸町よあり○此邊を金鳥居ともいへり足利氏銅の鳥居を建んとして其功を峻さりし處ありといひ傳ふ

祭神　猿田彦大神

○塔の岡　本町より本社よ參る要路よして五層塔ある龜居山よつゞけるが故よ此名あり

○學校　本鳥内の小童そべて此門よ入る

○光明院　淨土宗なり天文の頃住職以八上人ゝ不凡の大德なりしと傳稱す

○谷ヶ原　茫々たる平原楓谷の山上よつゞけり麋鹿霜よ群をなして淺黄色つく秋のころ妻とふ聲のあはれなるハ風流士のはらはさよ去むあるべし

谷ヶ原麋鹿　八景の一

やつかはらむつれて遊ふ鹿見をゝともよ樂び神の御園か　千廣

因よ云鹿の名所を谷ヶ原としも定めさるゝ然ること
なゝらまた神垣よ眠りあるひゝ市中よ遊びて旅客よ

馴るゝなど皆憎からぬさまなり抑鹿ハ大神の蓄と稱して往古よりまきを獵る事を禁じ代々領主の保護嚴まく若誤て害する者あきバ卽罪ゑ行はる故ゑその獵年々繁殖すつらつら考ふるゑ鹿ハ神代ゑ太麻迦の占業ゑ用ゐらきまさ迦久神といへるも鹿のまとおりといへる說ありて幽冥ゑ去たしく仕奉る獸おり瑞應圖ゑ云鹿者純善之獸ナリ王孝則白鹿見ハルとも見ゐて角あれども常ゑ怒きる色おく其性の狡猾おらざるを神も愛したまふなるべし

○神力寺

眞言宗なり○舊此地ゑ寶泉院といへる寺ありしが廢寺となりける故當寺を瀧の尾より移したるなり

○秋葉神社

南町ゑあり

祭神　火産靈神

○紅葉谷

溪水清くして巖石奇なりかけ渡す橋のさま最趣深く兩岸ゑ櫻の大木ありて花の頃ハ霞きる白雲樓の軒ゑ

たなびくあるひハ時鳥を聞き暑を避るゑたよりよく紅葉ハ元より谷の名ゑおひて見るかぎり染つくし又雪の日ハ玉子酒の樂み自在ゑて雅となく俗となく四時ゑ客のたゆる事なし

紅葉谷ゑ落花を見て

水かゝふ櫻かもとの岩間より潛りかねたる花のうさかさ　蛙水

れくまきぬ花のなかるゝかけひかな　大必

川中の棧敷ゑすゝみタる日川涙のれとをまくらのうさゝねゑ秋を渡せる夢のうき橋　琴秀

秋日遊楓谷

丹楓蔭水々奔流臨水家々起小樓想得絃歌人散後　撚白

數聲鹿鳴滿山秋

谷の紅葉染つくしたりときゝて

日をへなハ鹿の跡ゑ糧るへしとく行て見ん谷のもみち葉　菊舍

巖藻亭ゑて

れとさむき夕山れろし吹そきてまとゑ落くる小男鹿の聲　寓蕎

○四之宮　紅葉谷ゑあり○此邊秋夜虫聲いとかなし

祭神　不詳

鳴く虫も夜ごろの月ゑ面なをて影そむ方ゑ聲ゑきるらむ　樵月

○瀧町　筋違橋を渡りて御山ゑ登る道なり○以下御山神社へ

参詣の順次ゑゑるす

○大聖院　真言宗なり當院ハ代々本社の別當職ゑて座主と稱し

たりしが明治四年改革の際社役をはなる創立は大同

元年なれども天文の禍ひゑ舊記を失ひたれバ委しき

事ハゑるよしなし然ども治承の御幸ゑ當院の住職

を阿著梨ゑなされまゑ天正年中ゑ仁勝法親王御止住

の事見ゑたりさをば昔時寺格の輕からざりし事思ひ

やるべし新禱堂ゑ豐太閤の守本尊たりし等身不動明

王を安置す○什物の内聖德太子の像ハ巨勢金岡の畫

きたるゑ後京極攝政真觀公の讃ありて珍らしき者也

此外弘法大師の真筆等あれども畧すまゑ豐太閤當院

の書院ゑて和歌の會を催したまひたりし時の歌三十

六首を一軸ゑして是又秘藏せり

五月ばかり大聖院ゑやどりて

山かけや行水くちき川の瀬ゑ岩きりとはし飛はゑるかな　貞勝

消もせて庭のかしハの葉かくれゑ螢いきつく雨のゆふ暮　正精

○多聞坊　真言宗ゑて彌山本願と稱せし寺なり

○西方院　真言宗なり○當院の庭ハ雪舟の造りたるものなりと

いひつゑふ

○一の鳥居　御山登路ゑ麓ゑあり

○祈不動堂　本尊不動明王ハ豐太閤の護身佛なりといふ

○瀧宮　一の鳥居より一丁余

祭神　瀧津姫命

○白糸瀧　瀧宮の山上より落て水勢甚はげしく實ゑ白糸を亂せ

るが如くいかなる旱ゑも渇る〻事なしまゑ此邊螢れ

はく瀧の去ら玉よ散みだるなしきいとすゝし

瀧宮水盤八景に一

雲井より落くる瀧の宮のへよ星となかれて飛ばさるかな　忠敏

○御幸石　治承四年高倉上皇あの石上より白糸瀧叡覽ありしと
いふ

○中の堂　一の鳥居より七丁余此處迄登路甚嶮岨なるが故よ參
詣の人れはく此堂よ憩ふ○名物ちから餅をひさぐ

○幕岩　數百丈の巖壁さながら幕を張りたるが如し

○力石　里諺に云福島左衛門太夫正則登山の時此石の邊よて
怪異の事ありしよりより直よ下山ありけるよし故よ太
夫戻の石ともいふなり

○二の鳥居　一の鳥居より十五丁

○二王門　古へ未剋より後此門を限りて登山を許さゝりしが明
治四年改革ありてより此禁なし

○水晶石　表は常の石よ異ならず中央の穴より覗へば數丈の石
中悉く水晶なりといふ

○御山神社　一の鳥居より十八丁

祭神　市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

當社へ大神當島へ御鎮座のはじめ影向ありし御舊跡
なるが故よ三柱の姫神を鎮めまつりしよいつの頃よ
りか三鬼神を合せまつりて大神の御名へ稱ふる者も
なく隱れたまひたりしを明治四年舊よ復して斯く祭
る事とへ成たりまた大神鎮座の山なれへ御山と稱へ
しを佛家の徒山勢の不凡なるを須彌山よ比して彌山
と改称しがよるも舊よ復せらるたり

○神鴉　形細くして凡鴉よ異なり始祖へ大神當島よ御鎮座の
時去たがひ來るる由社傳あり毎年雌雄一雙を産し陰
暦九月廿八日同郡海向ひ大野村大頭神社よ於て四鳥
の別をなし親鳥の行方を去らず然るよ慶應二年大野
村戰場となりて一年別鴉の式を怠りしより爾來雌雄

二雙と成れりされど二雙の外に更に増殖する事無し

御山神鴉八景の一　重遠

世と共に勒て神に仕ふるをあさからすとや見そなはす覽

○求聞持堂　本尊虚空藏菩薩に弘法大師の作なり此堂に大師求聞持修法滿座の靈場にして修法の行者千有餘年の今日に至るまで一座も絶る事なしされば圓燈に焚く火に大師開持より傳はりといふ○堂内に大師の手蹟其外什物あり

○閼伽井　大師修法の加持水にして甚清洌なり

○曼陀羅石　盤面に梵字また眞字を鐫たり大師の作なりといふ

○時雨櫻　花ざかりして露深し山風にあひ散かゝる露さながらなぐれに似たり

○玉取岩　石面に玉を取りたりといへる痕あり

○鐘擂堂　治承元年右大將平宗盛寄附洪鐘を鈎たり

○吡沙門堂　堂中に武林士式の寫彌山佳景と題せる額あり士式に

○頂上石

○龍燈杉　孟子の裔にて義士唯七の祖父なり

當山の絶頂にあり近年大かた枯行きてたふれ

數百歳を經たる老杉なり近年大かた枯行きてたふれたるまゝ僅に枝葉の青きを存せり○此處は燈龍を臨觀するに便よければ龍燈の上る夜に遠近の男女これ杉のもとに群集せり故にかく名付たり龍燈とは舊來正月元日同六日の夜等當島浦々の海面より現はるゝ火をいふ火色常の燈火に異ならず山上より臨めば漁火の如しといへども間近く見れば尺餘の一團火波を照して海底より浮び出る形勢甚すさまじといへり

初月沈山夜氣凝老杉風外坐巖稜茫々海面昏如墨

現出神龍幾點燈　桑宅

明治六年一月一日夜龍燈のあがりけると聞きて

波の上にけふさゝくるわたさつみの都も年やたつの燈火　千枝

○船石　形船に似たり

○大日堂

大同元年弘法大師の建立なり○堂内に木造の燈籠あり甚古代なるもれなり

○奥ノ院

大師堂彌勒堂等あり

○龍ヶ馬場

巖上に馬蹄の跡あるが故に駒ヶ林といふといへり或云馬蹄の跡といへるハ弘中隆包毛利元就と戰ひし時陣とりたる幕串れ跡なりまた駒ヶ林ハ駒返しの誤りなりともいへり

○三劍ノ窟

往古劍を収めし處なりといふ

○龍ヶ窟

むかし龍の出しといへる巖穴あり深さ量るべからず盤石覆ひかゝりてれのづから一室をなせり弘法大師護摩修法ありし處なるより内に大師の像を安置す

○護摩谷

○おもより二王門に出で元の道に歸るまた谷路つたひ踏鞴(たたら)潟に出る道もあり

○巡島式

此式ハ大神鎮座のはじめ先大宮處を定んとて佐伯鞍職所の翁等神鴉の先導にまさがひて浦々を巡りたまひし例にならひて七浦の神社に拜し鳥啄(とくぶ)の式を行ふなり其式ハ願主吉辰を撰みて島廻りの事を社務所に依頼し神官の承諾を聞き本日未明より各潔祓して船に乘る此時神官の船に四手切かけ榊おし立亂聲を奏して先に進む續て願主の船も山を右におして漕出す明ぼの〻けしき身にしミて蓬萊巖の鼻を出るバ東の方波路てるけき山の端よりにほひ出る朝日影の海原に輝くおそれろゝある言葉にハ盡しがたしかくて七浦の神社を巡り本社に歸りて神樂を奏すを例とそ○

以下島巡りの順次にしるす

○聖崎

當島北の鼻なり是より東を島の裏とす

○蓬萊巖

形畫がける蓬萊山といふものに似さり

ゆふしほやたゝはらいのはなの涙　若翁

○海氣

清明の後殊に長閑なる日蓬萊巖の沖なる海上へ一面の金氣發して中に宮殿樓閣樹木等のかさちあらはれ

暫くありてかつかつ消散し所謂屋氣樓のたぐひなし
ていまだ其理を究めたるをきかず土人いまをも蓬
萊といへり○古説ゑゐ此邊の海底もべて金砂なるが
故ゑ其氣の發するもれなりといふ近來ゐ海草の氣の
蒸發するゑ社頭の景色の反射せるものなりともいふ

○杉ノ浦神社　島巡第一の拜所なり

祭神　底津少童命

島めぐりの時此浦ゑ船を寄せて神社ゑ參り神官祝詞
竟りて笛を奏し願主はじめ各拜す以下七浦の拜式拜
をはりて朝餉の式ありはなはだ古風を存ず同之

○金岡水　杉ノ浦の奥二丁ゑありつ此邊平洲ゑ金砂ゐはく交を
りさる故ゑや水寒洌ゑして且甘味あり

山かけゑ千代の契もむすはなん清水をなつれ命ゑゐして　央

○包ノ浦神社　七浦の外なり島巡の時船より拜す

祭神　鹽土翁

○鷹巣浦神社　島巡第二の拜處なり○此浦ゑ鷹の爪貝といへるあり

祭神　底筒男命

○腰少浦神社　島巡第三の拜所なり

祭神　中津少童命

○鰈崎　比目魚ゑ似さる石あり故ゑ名づく

○青海苔浦神社　島巡第四の拜所なり○島巡の時午飯の式あり

祭神　中筒男命

○陶全姜敗死跡　青海苔浦の奥十丁余高安ヶ原といへる地あり全姜ハ
大内義隆の臣なり主家を亡して勢ひ近國ゑおよばん
とせしを毛利元就のためゑ滅せらる

○食父崎神社　七浦の外なり

祭神　靈鴉

此處ハ濱もなく洲もなし故ゑ島巡の時船中より拜す
かくて神宮海中ゑ榮を浮べ樂を奏すれば靈鴉忽ち山
上より翔來りて波ゑ浮べる榮を啄へて御山ゑはこぶ

是を鳥啄式といふ○此式を行ふ事願主の望による事なれば定まれる日なし故に久しく行はざる時あり又一日に五組十組かさねてまをを行ふといへども靈鴉の行ひかはる事なく万一あやまちて船中に穢あれば靈鴉粢を運ぶことなしといふ

輕波一棹賽春祠七浦風光逐次移笛裏神鴉飛欲下
舟人搖櫓自遲々　慎齋

○山白濱神社　島巡第五の拜所なり

〔祭神　表津少童命

○革籠崎　當島南の鼻なり是より西を島の表とす○此地に早咲の櫻一樹ありて雨水の頃より蕾を破る

唐まろもはるまさ寒き浦かせに　ほころび初る花の去さ紐　爲子

○須屋浦神社　島巡第六の拜所なり○島巡の時餡餅の饗あり

祭神　表筒男命

○磯の清水　磯際にありて潮退きたる後一小池をなし涌出る水甚清洌なる故に往來の舟人まをを汲で須屋の清水と賞翫す

○御床浦神社　島巡第七の拜所なり○神前に大なる巖ありて龜甲の文をなせり

祭神　市杵島姫命

○內待石　大江の浦にあり治承年中德大寺實定卿本社に參詣ありて歸洛の節島人有子內侍あがぬ別を惜み此浦まで送り來りて悲歎の涙にくれし處なり○かくて後內侍此島をあくがれ出て津の國住吉の沖にて身を沈め果敢なくなりたりとぞ

○鞴蹈潟　平宗盛寄附の鐘を鑄さしめらるたる處なるによりて名づく○春の頃貝拾ひに便りよければ少女どもの打むれて遊びあへる處なり

○網の浦　此邊も櫻ばかりし○大元浦へ越んとする處を或人花の洞といへりしが實に其名空しからぬといふべし

○寶　物　寶庫ゑ納まをり拜見せんと望む人ゝ社務所ゑ願がふるべし

○高倉天皇之御扇　壹本

○安德天皇之御靴具　六品

御衣　石帶　笏　飾劔　箙　槍扇　何をもいとちいさし

○宸　翰　貳拾五枚

○親王御染筆　貳枚

○葦手書槍扇　壹本

○假　面　九面

援頭　遥城樂　陵王　納曾利　散手　貴德　採桑老

二ノ舞　同　胡蝶　以上承安の頃朝廷より御寄附のもれなり

中ゑも援頭の面ゝ享和二年天覽ゑ備へし時古物殊勝の品ゑ思召を大切ゑ致すべく旨叡翰を賜ふ　壹振

○奚　婁　假面同時の御寄附なりと言傳ふ

○鼓　壹挺

○笙　同上　五管

第一小櫻第二春風第三小男鹿第四國家丸第五獅子と稱す中ゑも小櫻ゝ高倉天皇御愛靴の器なりしを治承四年御幸の時御奉納ありしもれなり

小さくらの笙を見はべりて亂をたる世々をさくらの名もゑるく昔の儘ゑ匂ふ笛の音　有年

○篳　篥　壹管

○笛　三管

第一ゝ駐腦ゑて造り第二ゝ銅第三ゝ異なるもれゑあらず中ゑも駐腦の笛ゝ豐太閤征韓の時彼國より奉りしを毛利家ゑ賜ひ同家より本社ゑ寄附ありし者なり

○高麗笛　壹管

○和　琴　二張

○箏　壹張

法華と銘あり○律板柱とも添ふ

○琴　壹張

表裏とも蹟紋あり○平重衡愛翫の器よて唐の雷家の作なりと傳稱す

○琵琶　五面

第一谷川第二瀧浪第三磯浪第四落月第五無銘なり中よも第一谷川ハ玄上を摸して作りし者なりと傳稱し最殊勝なるもれなりまた第五ハ九條道房公愛翫の器なりと傳稱す

○太鼓　五挺

○羯鼓　三挺

○二ノ鼓　壹挺

○三ノ鼓　壹挺

○鑾鈴判木　壹枚

○小忌衣　壹領

○法華經　高倉天皇宸筆　八卷

○壽量品　同上　壹卷

○壽命經　同上　壹卷

○經　卷　壹函

法華經二十八卷無量義經觀普賢經阿彌陀經心經願文各一卷都て卅三卷平相國清盛公の寄附よして願文ハ公の自筆よて餘ハ一族三十二人各壹卷を分ちて書寫ありしもれなり其裝飾の結搆盡善盡美實よ當時平家の隆盛見るに足りり

後の世をあはきとへとや武士のたけき心もそ光紙よして　義一　八卷

○法華經　一卷闕

平清盛同頼盛の兩筆なり

○理趣經　弘法大師筆　壹卷

○般若心經　同上　壹卷

○細字法華經　同上　八卷
外函竪三寸横二寸深壹寸七歩字形の小さき事れしてゑるべし
○華嚴經　筆者不知　五拾五卷
○袈裟　反古の裏ゑ寫して殊勝なるもけなり○反古經とも云　弘法大師隨身品　壹肩
○鈴杵臺盤　同上　壹具
○五鈷三鈷獨鈷　同上　各壹握
○赤栴檀佛像　毗首羯摩作　壹龕
○古文書　貳百十八卷
○榮花物語　松木内大臣宗條公筆　全部
○奉納和歌　藤原經尹卿筆　壹卷
○和漢朗詠集　冷泉爲成卿筆　壹卷
○本島八景書詩歌　諸名家筆　三卷

○百人一首　外山光和卿筆　壹冊
○香記　壹卷
○掛物　廿六幅
巨勢金岡東福寺兆殿司狩野探幽等の筆あり
○硯　貳面
○墨　壹挺
○文臺　硯箱共　壹脚
○太刀　五十四口
螺鈿　兵庫鎌　嚴物作　裝束帶　錦包藤卷　衛府　新髭切
綱切　稻光　彦左近等と銘せるものありて作ハ　信國
天國　友成　貞秀　一文字　久國　助次助家兩作　國俊國
行兩作　菊一文字　兼光等を以て稱譽す
○劍　三口
○刀　四十七口
亂髮正と銘せるもけあり作ハ正廣ナ則國ナ西連　左文字

保昌五郎　地藏信國　助國　等を以て稱譽す　冊三口

○短刀　天國　神息　友成　波平　行平　國光　正宗　國行　國俊

志津三郎兼氏　國光　兼光　村正　定廣　等の作あり

○薙刀　貞宗　宗貞　等の作あり　五振

○鎗　信國　金造　等の作あり　八本

上に擧げたる人々のよく稱讃するもれを拔出さるべて此外にも名作數多あるべなれば悉く熟覽して燒刃匂等の異味を知るべし

○弓　九張

○矢　十五筋

○甲冑　十三副

源義家同義光平重盛大內義隆等の着用ありしもれ各

一副また小櫻威一副あり殊に古の名作なりと傳稱す

又近來淺野家より寄附ありし物に兜面鎧胴鎧膝鎧籠手脇當大袖等ありしも名作ある中に兜に宗磨の作に

て世に比類なき由折紙に見えたり

○古鏡　二面

○曲玉　十二顆

○七寶杯　壹箇

○青磁塔　壹基

○蘭奢待香　壹包

○赤栴檀　壹包

○沉ノ枝　長五尺三寸余　壹本

○沈枕　壹箇

○青磁枕　壹箇

○黃楊駒　壹頭

○銀獅子　壹頭

○木馬　弊殿の翫物と傳稱す　壹頭

○祓器　壹具

○古銅印　二顆

○古錢　豐太閤社參の時納めたまひし賽錢なり　三百八十九枚

○年中定祭日幷行事式

○官祭

○月並祭　一月一日下同之二月以御簾捲垂神饌進撤祝詞奏上神官拜禮等の次第は新年祭の條に委くこれを載すべし

○日供　祭日の外日々獻ずべし

○元始祭　同月三日

○孝明天皇祭　同月廿日○御垣の原に遙拜所を設く

○祈年祭　月日不定○二月四日式部寮に報して班幣あり地方廳へ到着の上吉日を卜して祭日を定む其式は地方長官以下祭に關る官員及び神官共に前日より齋戒す當日早朝神官神殿を裝飾し午前第八時神官地方官一同幄舍に着く次に御幣物を幄舍の前に入置く次に宮司社殿に昇りて御簾を捲き畢て例に依て此間奏樂次に稱宜以下神饌を傳供す此間も奏樂次に屬御幣物を辛櫃より出し假に案上に置く次に宮司御幣物を神前の案上に奉り座に着て祝詞を奏す次に地方長官玉串を奉り拜禮畢て幄舍に復す次に屬以下拜禮次に宮司玉串を奉り拜禮畢て幄舍に復す次に稱宜以下拜禮次に御幣物及神饌を撤す此間奏樂次に宮司御簾を垂る畢て下殿神官一同幄舍に復す此間も奏樂次に退出す○神饌八臺　和稻荒稻酒二瓶　海魚　川魚　海菜　野菜　菓　鹽水　以上

○紀元節　二月十一日○遙拜所同上

○神武天皇祭　四月三日○同上

○例祭　六月十七日○祭式祈年祭に同くして地方次官同屬等

○大祓　同月三十日
○神嘗祭　九月十七日○遙拜所同上
○新嘗祭　十一月廿三日○祭式祈年祭ゑ同じ
○大祓　十二月卅一日
○除夜祭　同月同日

私祭

○神衣祭　一月一日○午前第一時神官一同幄舍ゑ着き稱宜神衣を内陣ゑ奉る○神衣ハ白綾ゑ龜甲の紋を織出しさるもれなり前年機殿ゑ注繩引廻し服工製してまをを調し社頭ゑ収む神官まれを裁縫て本日此式あり
○新年祭　同月同日○舞樂あり振鉾
因ゑ云當島ゑ家居せる者ハ毎朝小桶を持て神前の潮を汲歸り屋内を清むる事一日もれまさる事なし殊ゑ一月一日ハ未明より戸々きはひ出て神前ゑ至り潮を汲み家をそゝぎ身を清めて本社ゑ參詣そるを例とす是を若潮迎へといふ

明治九年一月一日廣前ゑはべりて　瓦穂

さと人のくひや御前の若潮ゑはのはれさらむ去年の月影

○同二ノ祭　同月二日○舞樂ゑ万歳樂延喜樂あり
○同三ノ祭　同月三日○舞樂ゑ太平樂狛鉾胡德樂陵王納曾利あり
本日の太平樂ハ治承年中左大將德大寺實定卿本社の廣前ゑて奏たまひしを例として世々神官野坂家ゑて勤先來をり○因ゑ云當社の舞樂ハ最上古より傳はりていまゑしへの盛なりしてとハ神庫ゑ収まをる樂器を見ても去るべしまさ拔頭蘇香還城樂等の秘曲もみな舊神官の家々ゑ傳ハりて今ゑ存せり○舞樂奉納せんと願ふ人あをバ臨時ゑも行ふ事あり
○楊枝獻上祭　同月四日○楊枝ハ當島産物の第一なり故ゑ獻す
○斧始式　同月同日

○地久祭

同月五日○舞樂ゑ振鉾甘州林霞拔頭還城樂あり○本日ハ未明より行ひて朝日影御山の嶺よりゑはひ出て舞人の面を照そを例とせり故ゑ日の出祭ともいふ

○月並舞樂温習

同月十五日（二月以下准之）まゑ臨時ゑも行ふ

○月並祭

同月十七日（二月以下准之）

○月並和歌會

同月廿五日（二月以下准之）天神社の拜殿ゑて行ひ兼題の短冊を神前ゑ掲ぐ

○歌會講中安全祭

三月十七日○講中の輩ハ幣殿ゑて拜禮を許す

○同　靈神祭

同月同日

○推古天皇祭

四月十八日○舞樂ゑ萬歲樂延喜樂陵王納曾利あり

○桃花祭

以桃花盛定日○嘗ハ三月十五日を定日とせり○舞樂ゑ振鉾一曲曾利古桃李花舞ナ萬歲樂延喜樂散手貴德陵王納曾利あり○此祭式ハ薄暮よりはじまりて音樂中桃花を本殿ゑ獻ず

○歌會島巡

五月十五日

○管絃祭

陰暦六月十七日相當日○此祭式ハ御船三艘を組で屋形を造り神輿を乘せ奉りて神官左右ゑ列そ水主ハ素袍袴ゑて烏帽子を冠り各棹を取るまゑ引船三艘蜈蚣の如く艦をれし並べて先ゑ立ち大鳥居の前より直ゑ瑞御前神社海向ひの廣前ゑ渡り神事ありて管絃を奏一里余そそれより本島ゑ歸り長濱神社大元神社等の前ゑて も管絃ありて御船を大鳥居より本社火燒崎ゑ漕入を祭式最嚴重あり次ゑ客神社の御前ゑ至り管絃等前の如しかくて御船を升形玉の御池の内ゑ入き三回めぐらして本殿ゑ還幸おし奉るを例とせり○此祭式を拜んと諸國より集ひ來る船舳艦相接て海原を狹しとす此夜各船の帆柱屋形等まゑ戸々の屋上ゑ揭げて獻る神燈幾數万なるまとを知らせさらぬだゑ月明らけき夜靈火の影廣き海面を照し管絃の音心耳を澄して誰かハ渴仰の思淺かるべき實ゑ海西の大祭壯觀まゑ類ひな

かるべし○此祭式ハ薄暮汐のさし來る頃より始めて子剋ばかり汐の退く頃終るを舊來の式とす故ゑなは陰暦六月十七日相當日を以て行ふなり昔ハ神官供僧左右ゑ列座して神官管絃を奏し供僧伽陀を修したりしが明治四年改めて上文の如くなりたり

地似蓬壺開別寰危檣層閣一灣々鳳綢僊管月娥舞龍負神舟
天女還廊底潮聲人踏海街頭燈焰市燒山豈知游客繁華夢在
此林猴野鹿間　霜山

因ゑ云此祭式ゑ御船の供奉として廣島の町々より御供船と稱し猩々緋ゑ金銀の糸もて種々の繪を縫たる幕を走らし幟吹貫を押立今樣の音曲を雜しつゝ祭禮の前夜廣島の川口を出て本日の祭式ゑ闌り翌日廣島ゑ歸る遠近の男女ゑをも見んとて群集なす事まされびたゝし

○歌會講社安全祭　九月十七日○講中の拜禮式三月ゑ同じ

○同　盤神祭　同月同日

○菊花祭　以菊花盛定日○舞樂ゑ振鉾一曲曾利古賀殿舞ナ萬歳樂延喜樂散手貴德陵王納曾利等あり○式ハ桃花祭ゑなじく音樂中菊花を本殿ゑ獻す

○歌會鄙島　十月十五日

○天長節祭　十一月三日○舞樂ゑ萬歳樂延喜樂陵王納曾利等あり

○神衣裁縫　十二月廿六日より廿九日ゑ至る

○御煤拂式　同月卅一日

○鎮火祭　同月同日○午後第六時松明の式あり

○產物　雷島ゑ產して人のよく賞譽するもれを擧ぐ

○色楊枝　かさち種々ゑ削りなして五色ゑ染ゆけさる最美しきもれなり

○杓子　大小種々ありいゑしへ島人潛心といへる者削り初たる故ゑ清心杓子といひて用ゐるゑ甚便りよし

○木匙　近來い形種々ゑ削なしていとたくみなるあり

○木盆　撲樣種々彫刻せり中ゑも神園の書村まさ御幸松の古木等を以て造さる者あり好事の人愛翫そべし

○蘭　御山の深谷ゑ生せ石蘭柔蘭片葉蘭紫蘭岩千鳥蘭孔雀蘭等の數種あり文客盆栽ゑして愛すべきもれなり

片葉蘭といへるまとを物名ゑよ光る

文机のかさはらゑ置てまれも又風雅の友の一くさゑせひ　道直

○岩茸　御山千仞の谷なる巖壁ゑ生せ採る者甚危しといふ

○薯蕷　御山ゑ產するもれ治養ゑ功驗ありといふ

○松露　須屋浦ゑ生ずるものをよしとす

○海松貝　雷島の近海ゑ產ず甘味ありていやしからず

○目張魚　革籠崎の邊ゑて釣たるもれ味ひ殊ゑ美なり

○櫻海苔　御床浦邊より出る雅人の賞すべきもれなり

○總太郎漬　糠を水ゑ浸して魚肉貝肉等を漬たり好事の人雅味なりとて賞せり

○雪花漬　豆腐の壳ゑ魚肉貝肉菌等を漬て風味はなはだ愛すべきもれなり

○裏櫻餅　御垣の原ゑて鬻ぐ上戸の去らざる味ひまさ愛すべし

都まて風の便りゑかをり來てそれ名ゆかしきうら櫻かな　三屋子

○木鹿　島人小川耳平字米齋といへる老人の彫刻したるそれ能く眞を得たりとて世ゑ賞せらる明治十年內國博覽場へ出して花紋賞牌を拜授せり

嚴島宮路の枝折了

誤　正

○二丁オ八行きハな。○四丁オ十四行淺野ノ下ニの諸ヲ脱ス

○六丁ウ七行黒ハ墨。○同ウ十三行幸ハ孝。○九丁オ八行十行

○印ハ衍　○十丁ウ五行ぬハね。○十一丁オ二行胡ハ故。○十

三丁オ十行黄ハ茅。○廿丁ウ二行るハ衛　○廿三丁ウ八行遣ハ道。

○廿四丁オ四行ゑハえ。○廿五丁オ四行側ハ側。

明治十一年六月十三日出版　御届濟
同　年七月十日　刻成

明治十五年七月廿七日修正再版　御届濟
同　年七月　刻成

明治十七年七月十二日第二回修正出版　御届濟
同　年八月十日　刻成

定價拾五錢

編輯兼出版人　廣島縣士族　村田良穂
廣島縣安藝國佐伯郡嚴島百四十五番邸寄留

發兌所　廣島以文社
同縣廣島區細工町八十九番邸

終